翼ばあーる

アフガニスタン山の学校だより26号

第10回 総会&現地報告会

東京は9月15日(日)
小金井市民交流センターに決まりました！

大阪会場は次号にてお知らせいたします。
詳細につきましても、別途あらためてご案内いたします。
皆さまのご参加、お待ちしております！

ポーランデの春。晴れた日にみんなで絨毯を洗う(乾燥しているので、そのまま干しておけば、二日もあれば乾いてしまう)。

山の学校支援の会の活動は10年目を迎え、いよいよ最終年となりました。私が最初に山の学校を訪れたのは2002年でしたが、当時の1年生がこの春で高校3年生、月日の早さを実感します。その間、アフガニスタンの和平が達成されなかったのは残念ですが、地域の人々の生活が少しずつ改善され向上してきたことを間近に見ることができました。

先日、日本に着任したサイード・ファティミ新大使と面談する機会がありました。その際、大使に私が撮ったアフガニスタンの子どもの写真集やカレンダーをお見せすると、「どの子もみな私たちの子どもたちです」と目を細めていました。私が大使に出身地を尋ねると、「どこの出身かはあまり大切ではありません。みなアフガニスタン人ですから」と答えるのでした。故マスードが「パシュトゥーン、タジク、ハザラかは関係ない。みな同じアフガン人だ」と話していたのを思い出し、胸が熱くなりました。民族や地域の違い、思想信条にこだわることなく、同じアフガン人としての一体感こそ、アフガニスタンを平和に導き、新しい国づくりの礎となっていくはずです。

アフガニスタンの4月。杏やアーモンドの木が淡いピンクの花を渓谷の一面に咲かせていることでしょう。寒風で頬を真っ赤にした子どもたちは雪渓の雪をかじりながら、山道を駆けるように通学しているに違いありません。学ぶことに夢を見いだし、自分の道を切り開こうとするこの子たちこそアフガニスタンの未来そのものだと思います。これからも皆様とアフガニスタンを見守り続けていければと願っています。

長倉洋海

大切なお知らせ

アフガニスタン山の学校支援の会 2014年4月以降の活動について

本会はパンシール渓谷ポーランデ村の子どもたちが安心して学習を続けられる条件整備および環境づくりを目的として、2004年2月に設立されました。10年後にはアフガニスタンの教育をとりまく環境も改善しているだろうと考え、当初の活動期間を10年と想定しておりましたが、その期限が2014年3月と迫ってきました。それ以降の活動方針について運営委員会で協議した結果をご報告いたします。

■活動期間の延長

当初、本会の活動期間は2014年3月末までとしておりましたが、現地の状況を考慮し、当会の資金の続くかぎり支援活動をしていくことにしました。なお、期間は3年間を想定しています(2017年3月まで)。

■活動規模・体制

2014年3月末時点で残っている活動資金は、国内活動をさらに縮小することで、できるかぎり現地の教育支援に使います。具体的には以下のような活動内容を考えています。

①現地支援活動

・教職員給与支援と女性教師の送迎、および女子高生の通学支援については引き続き実施します。

・年1回実施している現地訪問は、引き続き実施します。ただし訪問団の規模は現在より縮小し、基本的には1名の訪問を予定しています。

・生徒や学校への文房具等の提供、新入生や成績優秀者へのプレゼントについては、状況をみて継続するかどうか判断します。

・サフダル前校長遺児への育英金の支払いは継続します。

②国内活動

・東京で毎年開催している総会は、本年(2013年)10回目の開催をもって最後とします。

・東京、大阪で毎年開催している現地報告会については、来年以降は、東京開催のみとし、開催規模については、必要に応じて検討します。

・年3回程度発行している会報(ばあーる)は2014年年初に発行する号をもって最終号とします。それ以降は、現地支援活動の様子や活動資金の使途について紹介する簡単な報告書を年1回程度、お届けする予定です。

・運営委員による運営会議を毎月実施しておりますが、今後は年数回の開催とする予定です。具体的には、現地訪問の前後と現地報告会の準備等のために開催することを想定しています。

・新規会員の受付は2014年3月末をもって終了します。

あたたかいご支援、ありがとうございました。これまでの活動に関してのご意見やご感想をぜひ事務局までお寄せください。お待ちしております。

ムルサルさんのカブール通信

モットーはプロ根性―アフガン女性の生活支援と自立を目指して

安井浩美

私のアフガニスタン暮らしも今年で13年目。本職は、ジャーナリストで現在も共同通信社の現地通信員を務めながら、アフガン女性の生活支援と自立を目指して、「シルクロード・バーミヤン・ハンディクラフト」（SRBH）というアフガニスタン伝統の刺しゅうなどの技術を生かした手工芸品の製造販売をおこなう会社を立ち上げました。従業員の9割が女性です。

長い戦乱で国民の多くが教育を受けられず、読み書きができないお国柄。男性で30％、女性では10％に満たない識字率。就学経験があったとしても就職口をみつけるのが困難なこの国で、読み書きのできない人が職に就くのは至難の業。日雇いで働くしかすべのない男性も多い。戦争で夫を亡くした未亡人や、障害のある夫に代わって働く女性など、生きていくために女性や子どもが働かなければならないのも事実。

しかしながら、多民族国家のアフガニスタンでは、民族により多少の違いはあるものの女性が働く習慣がなく、女性が外で働く家庭の男性は、周囲から「甲斐性なし」とみなされる傾向にあるためか、貧困であっても女性が働くことを嫌がる男性も多い。中には、子どもが病気になってもお金がないと病院に連れていかない夫や薬を買うお金を出さない夫もいます。

うちで働く女性の中にも、夫に隠れてこっそり工房へやってきては刺しゅうの仕事をもらい、夫の留守中に刺しゅうを仕上げ、賃金をもらう。夫に知られると暴力を振るわれるため、いつもびくびくしながら工房にやってきます。時には、顔に青あざを作ってやってくる女性もいます。もちろん夫や、時には姑に殴られるのです。理由は、外出時間が長い、仕事が遅い、子どもが泣くのがうるさい、むしゃくしゃするなど。嫁を殴ることで気分を晴らす夫も多いのです。

抑圧される女性たち。
婚約を断った男性に塩酸を頭からかけられた女性(左)
夫の家族の暴行を受け、精神不安定な女性(右下)

日本のみなさんは、どうして、そんな夫に注意をしないのかとお思いでしょう。しかし、アフガニスタンでは、それは逆効果。他人の干渉は、さらに嫁の立場を悪くする、理屈が通らない世界なのです。一部の家庭では、女性の地位は低く、憂さ晴らしの対象として夫や夫の家族から殴る蹴る、さらには爪をはぐなどの暴行を受け、土蔵に閉じ込められた女性が警察に救出されるなどの事件がおきており、人間以下の扱いをうける女性の存在が昨今、アフガニスタンの社会問題になっています。そんな背景もあり、女性ができるだけ周囲の抑圧や負担を感じずに働け、貧困の解消につながればとSRBHを立ち上げたわけです。と同時に貧困でアフガニスタンの伝統的な手工芸技術が途絶えるのを阻止する意味も含みます。

（次頁につづく）↖

広がれ！パネル展の輪

2012年12月11日(火)～18日(火)
埼玉県　さいたま市立浦和南高等学校

12月18日(火)の長倉代表の講演に合わせて校内でパネル展が開催されました。

真剣に写真を見つめる高校生

事務局から

●2013年度(最終年度)分割会費納入の郵便振替用紙を同封させていただきました。会費残額は封筒宛名ラベル下段の数字で表示しています。ご確認の上指定期日までに残額の納入をお願いいたします。

●JVC(日本国際ボランティアセンター)国際協力カレンダー2013「大地にうたう」をご購入いただきありがとうございました。大変好評につき今回も収益の一部(225、372円)が協力金として本会に還元されました。

●不要切手、書き損じはがきのご提供いつもありがとうございます。今回も会報発送の一部に使わせていただき大変助かっています。引き続きご協力をお願い申し上げます。

●ご支援に感謝を込めてポストカードを2枚同封させていただきましたのでどうぞご活用ください。なお、ポストカード(第2集～第6集)はまだ事務局に在庫があります。ご購入いただけましたら幸いです。

●これまでの活動に関してのご意見やご感想をぜひ事務局までお寄せください。お待ちしております。

●住所変更の場合はお手数ですが事務局にご連絡をお願いいたします。

ムルサルさんのカブール通信

↙（中頁からのつづき）

ＳＲＢＨも今年で７年目を迎えます。モットーは、Professionalism（プロ根性）。スタート直後は、そんなものはほど遠い存在で、「仕事は半人前だけど、お金は、一人前もらいたい。だって私は、貧乏でかわいそうだから」という感じ。呆れてものが言えません。きっちり仕事をしない人には、賃金を支払わないようにしたり、わざと他の人に仕事を回してプレッシャーを与えたりとあの手この手でプロとは何ぞやをわからせるのに５年はかかったでしょうか。そんな甲斐あって、中には刺しゅうで稼いだお金をもとに土地を買った女性もいます。しかし、私にとってやっぱり一番大変だと感じるのは、文盲の人と働くということ。

SRBHの人気商品テディベア

１から１００まで全部口頭で説明しないといけない。もう神経衰弱になりそう。最初は、戦争で勉強したくてもできなかったんだから我慢我慢と思いながらも、やはり疲れて頭にくることもあります。日本語で「あほっ」と叫びながら鬱憤をはらしたりして。

わが社の看板商品は、地元民がテーブルクロスとして使用するバーミヤンで手織りされたカラフルな布にアフガニスタン伝統のモチーフを手刺しゅうしたバッグ類。アフガンピースベアと呼ばれるアフガニスタンの民族服を着たテディベアは人気商品です。アフガニスタンの女性たちは、手先が大変器用で、刺しゅう、編み物、ビーズ刺しゅうなどなんでも来い。現在カブールの工房では50人ほどの女性たちが製品の刺しゅうを担当し、14人の織り子さんたちが布を織り続けています。ある母娘は、ピースベアを担当。５０００体以上のピースベアを製作。ここ２年ほどやっと、みな同じ顔のピースベアが作れるようになりました。と、いまだ試行錯誤ながらも、ゆっくりと前に進み続けています。

バーミヤンで手織りされている布

アフガニスタンでは、この手のプロジェクトは、ＮＧＯとして活動しているところが多い。しかし私は、ＮＧＯではなく自分たちで企業を回していけるようになってほしいと、支援金を頼りにせず会社組織にこだわってきました。いまのところ経営は楽ではありませんが、それなりに良い商品ができあがってきています。来年には、外国軍も撤退し、アフガニスタンに暮らす外国人の数もぐっと減ります。これからが正念場。どう乗り切るかにわが社の将来がかかっています。社員一丸となってこの波を乗り切っていこうと思います。皆様のご愛顧を心よりお待ちしております。

ポーランデの小さな仲間たち

ハスィーバちゃん 6歳

ザビウッラーくん 6歳

ワーセフくん 6歳

ウァーレスくん 6歳

ソラヤちゃん 7歳

スーモアちゃん 7歳

第10回総会は 9月15日(日)
小金井市民交流センター《東京》です。

アフガニスタン 山の学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、パンシール渓谷ポーランデ村の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたり活動を続けていきます。

アフガニスタン 山の学校の会
〒187-0032 東京都小平市小川町 1-1071-15 比留川気付
FAX&留守番電話：042-345-7805 E-mail:info_yamanogakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
郵便振替口座：00160-1-667404
編集●天野みか 岩動 紫 大守 裕 佐々木瑞紀 水間真紀
題字●近藤理恵 デザイン●浅井充志 印刷●藤田印刷（株）